

ホック氏香港島

書き下ろし長編ミステリー
必死の追撃行は上海から香港へ!!

加納

一郎



ホック氏・香港島の

加納

一郎

書き下ろし長編ミステリー
必死の追撃行は上海から香港へ!!



挑戦の香港・ホック氏

わたしたちの急追撃が効を奏して首尾よくマーガレットの行方を突きとめ、救出に成功するか、モリアーティとその背後の青帮の組織が私たち、わけても仇敵といわれているサミュエル・ホック氏を倒すか予断は許されない状況であるから、私たちは帰途も充分に周囲を注意しながら、とりあえずホッ

ホテルに帰りついた。シン守中にも変ったところはな



ろ早朝は催眠鬼道士との死
朝は北にいつて、また南市の阿片窟での危機と、これまで体力がよ
く氏の宿舎のヴィクトリア・
プソン警部の部下二名が留
闘、それから静妙観、つい
かったと報告した。なにし

たと思たと思われるほど消耗の烈しい一日であつた。

ツク氏、ツク氏、張警補、ホイットニー大尉のトリオの追撃行……舞台は
ら香港ら香港へ。壮大なスケールで描く書き下ろし長編ミステリー!!

ISBN4-575-00264-X C0293 P710E

定価710円(本体689円)

長編ミステリー

氏・香港島の挑戦

目次

プロローグ……………7

第一部 迷宮の魔道士……………11

第二部 暗器“点穴針”……………59

第三部 シェクラブコック島の冒険……………133

第四部 モリアーティの最期……………181

エピローグ……………234

ホック氏・香港島の挑戦

著者——加納 一朗

発行者——清水文人／発行所——(株)双葉社

〒一六二 東京都新宿区東五軒町三番一八号

電話・東京〇三—二六八—五一一(代表)

振替・東京八一—二七二九九

印刷——慶昌堂印刷株式会社

製本——大和製本株式会社

●落丁本・乱丁本は本社にておとりかえいたします。

●定価・発行日はカバーに表示してあります。

© Ichirō Kanoh 1988 Printed in Japan

ISBN4-575-00264-X C0293

プロローグ

ちょうど一年前の秋、私は東京で英語教師をしている若いアメリカの青年を紹介された。

彼の名はチャールズ・ホイットニーといって、オハイオ州の州立大学を卒業すると、かねてからあこがれていた東洋に職を求め、日本にやってきたのである。銀座裏にあるイングリッシュ・スクールでもらう給料は微々たるもので、世界一物価の高いといわれる東京でマンションの一室を借り生活するのは大変であろうと察したが、故郷の実家は裕福らしく、月々、ある程度の仕送りを受けているとのことであった。

彼は身長一七八センチのなかなかの快活な青年で、来日して日の浅い日本のすべてに旺盛な好奇心を燃や

し、見聞するものすべてに貪欲な、それでいてかなりくわしい知識に裏付けされた質問を發し、私をとまどわせることもしばしばであった。

「最終の目標は中国で働くことです。故郷にいたころは中国と日本は共通点がいろいろとあって、日本にいれば中国的なものが理解できるのではないかと考えていました。ところが実際に来てみると大違いなんです。まして東京ときたらニューヨークなみ。目に触れるのはコンピュータ万能の社会です。せわしげに動いている人と車はたしかに異常なほどの活気はありますが、日本の佳きものが次第に失われて行くような気がします。たまに、田舎へ旅行して静かな寺の境内を歩いていると、ぼくのようなアメリカ人でさえほっとするんですよ」

彼と親しくなつて、何回目かに会ったとき、苦笑しながら彼はいった。

「どうして東洋——中国に関心を抱くようになった

の？」

と、そのとき私はたずねた。

「ぼく自身は生粋のアメリカ人ですが、わが家はイングラントから第二次大戦さなかの一九四三年にアメリカへ渡ったんです。曾祖父のアーサー・ホイットニーは若いころインドに駐留していたイギリス軍の将校でして、その後みずから志願して中国——当時の清国の上海総領事館付武官として、一八九一年から九九年まで約八年間、現地で過ごしました。アーサーはそこでイギリスの実業家の娘のマーガレット・エヴァンズと結婚して、ぼくの祖父が生まれたわけです。その祖父は成人してから貿易商となり中国や日本と商売をしていましたが、やがて第二次大戦で東洋貿易が困難になってきたり、住んでいたロンドンがドイツ軍の空襲にさらされるようになると、家族の身を考えて一家をあげ、兄弟がいたオハイオ州のクリーヴランドに移住したのです。祖父と父はそこで鉄鋼商としてそこそこの

成功をおさめて、父はいまもその商売をつづけています。ぼくが東洋に関心を抱いたのは、曾祖父の残した克明な日記を読んだからです。それから小さいころ祖父に中国や日本の話をよく聞かされたせいもあるでしょうね。曾祖父の生きた時代は、まさに失われた古き佳き時代で、人間にまだロマンが残っていた時代だという気がします。アーサーは中国で普通では味わえない出来事や冒険に遭遇したのです。もし、関心がありなら、もういまでは秘密にすべきことはなにもありませんから、その日記をお見せしてもいいですよ」私はぜひ見たいと答えた。チャールズはそのときの会話を忘れないで、それから一月ばかり経ったころ、故郷から送ってもらったという何冊かの分厚い日記帳を届けてくれた。

流麗な書体で書かれている日記帳の紙はさすがに年月を経て黄ばんでいた。私はつたない語学力を動員して、それを読みすすむうち、次第に惹き入れられたの

をおぼえている。

ランプのあかりの下、鶯鳥ベンにインクをつけては筆を走らせている、実際には見たこともないイギリス人の姿を私は思い浮かべた。

あとになってチャールズが、これが曾祖父のアーサーと曾祖母のマーガレットですといって、セピア色に褪せた楕円型の台紙の写真を見せてくれた。そこには立派な髭を鼻下に貯え、勲章が並んだ金モールの軍服に威儀を正して直立している男と、その左隣で椅子に腰をおろしている白っぽいドレス姿のうら若い美女が、かすかなほほえみを浮かべていた。

「老けて見えるけど、まだアーサーは二十八だったんですよ」

チャールズはさらにべつの写真を見せてくれた。これもセピア色になっていたが、このほうは四人の男女が写っている。女はマーガレットで、男のひとりとは私のアーサーとすぐにわかった。また、もうひとりの

男は中国人で、まるで力士のような肥った巨漢である。中国特有の長衫チヤンサンという服を着て、前額部を大きく剃り上げ、髪を長く編んで垂らしている弁髪ベンパツの姿である。その満月のように丸い顔の細い目で愉快そうに笑っている。

さらに中央のひとりとは、他の三人より長身で髭はなく写真で見ただけでも鋭い目を持ったイギリス人であった。年齢は三十五、六歳であろうか、痩せてはいるがバネのような強靱さを感じさせる。

「これが日記に出てくるサミュエル・ホック氏だね？」

と、私はその男を指さした。決して鮮明とはいえない古い写真でも、私にはすぐに見当がついたのである。

「そしてこの巨漢が張志源ヤン・シー・イェンという警補だろうか？」

「そうです」

私はほぼ百年前の人々の写真に見入った。彼等が急

に現実感を持ちはじめ、身近に感じられた。そう、彼等は実在していたのである。

裏を返すと日記とおなじ書体で、一八九一年十二月、上海サヴォイ・ホテル前庭という心おぼえがしるされていた。一八九一年といえば日本の明治二十四年である。この二年ほど前から日本でも一般向けの軽便写真機という木製の、いまのカメラとは比較にならない大きな箱のようなカメラが売り出されたり、照明用のマグネシウムが渡来したりして、ようやく写真が一般にも使用されはじめてきたころだが、当時の上海は数段進んでいたはずだから、この写真は本職の写真師ではなく、だれか素人が撮ったものであろう。本職にしてはうまくない。

私はチャールズの曾祖父アーサー・ホイットニーの日記と、私に実在感をもたらした写真をもとに、まず一編の作品を書き上げた。この作品は『ホック氏・紫禁城の対決』というタイトルで上梓されたが、お読み

になった方はわかる通り、実はまだ完結していないのである。早く先を書かなければいけないと思いながら、なかなかとりかかれなかったが、ようやくいくらかの時間ができたので、書き進めることにした。それにはチャールズ君のはげましと適切な助言があったことはいうまでもない。

第一部

迷宮の魔道士

一八九一年の十一月も押しつまった二十九日の朝は、重苦しい灰色の雲が垂れこめ、暖炉の火が恋しくなるほど底冷えのする日であった。

私は三日前に北京で別れたマーガレット・エヴァンズ嬢を、駅に迎えるために身仕度をととのえていた。早朝の領事館への北京からの電信によれば、北京はきのうから今年最初の本格的な雪であるという。今年の冬は早く、しかも厳しいそうである。

部屋の大きな姿見でネクタイのゆがみを直しながら、私は北京での数々の冒険を思い浮かべた。宏大で壮麗な紫禁城の絶対君主西太后と側近の宦官という中性人間の集団。宝物殿内の殺人、八達嶺の万里の長城での争闘、そして、わが敬愛するサミュエル・ホック氏の宿敵というウィリアム・モリアーティと、彼を庇

護する暗黒組織^{チンギ}青帮の魔手——。わけてもことの発端となった清朝の秘宝龍眼池の発見にかかわる顛末や、巨大な毒さそりの出現などの事実は、私に一生消えないであろう記憶を烙印のように焼きつけている。

その間、私は上海で機械工具類の輸入販売を手がけている実業家エヴァンズ&モースタン商会のヘンリー・エヴァンズ氏のひとり娘である、美しいマーガレット嬢と交際を深め、彼女に求婚した。彼女は商用の父と同行して北京に滞在していたが、三日おくれできょうの午前九時二十分着の列車でもどってくるのである。

私にとって唯一の気がかり——ちょうど青空の一面に暗雲が生じたように気がかりなのは、私たちが北京站を出発しようとしたとき、使いの少年によって届けられたモリアーティの執拗な復讐の予告文であった。

“忘るるなかれ 復讐の炎が汝を焼きつくすときを”
巧妙に逃亡したモリアーティは、どこから私たちが

をその蛭ひづのような目で盗視ひそみしていて、上海へもどる私たちへ、挑戦状を送りつけてきたのである。

ホック氏の言葉によれば、ウィリアム・モリアーティはヨーロッパの悪の帝王といわれたジェームズ・モリアーティ教授の弟だという。ホック氏はスイスのライヘンバッハの滝で教授と死闘を演じ、その結果教授は谷底へ墜落して死んだ。凶悪な犯罪者の血が共通しているモリアーティは三人兄弟で、ウィリアムは末弟であるが、彼のほうは東洋にまで触手を伸ばし、清国の政財界に深く根を張っている青帮と手を組んで、あらゆる悪をほしきままにしようとした矢先、ホック氏と清国按察使直属の警察官で中国拳法の達人である「大飯桶ダイパンボン」（大食漢）張志源チヤン・シイユン警補によって意図を粉砕されたのである。このいきさつには私もいくらかの微力をつくしたことを記しておきたい。私はヴィクトリア女王陛下の軍人として、名誉ある行動をとったつもりである。

私は姿見の前をはなれると玄関に向った。

領事館の玄関ホールですれちがおうとしたカークウッド副領事が、ニヤニヤしながらいった。

「おめかししてどこへお出掛けかね」

「駅へ。一時間で帰ってきます」

「君の愛しい人によりしくいつてくれたまえ」

「忘れずに伝えますよ」

と、私も笑いながら答えた。私とエヴァンズ嬢のあいだは領事館内の恰好の話題となっているらしい。

用意された馬車に乗りこむと、私は座席の背に身体をもたせかけた。わずか三日会わずにいるマーガレットに、一刻も早く会いたいという想いが胸をいっぱいにしていたのはわれながら不思議であった。恋というもの、これほどまでに男の感情を奪うものであるのか。彼女と北京駅頭で別れたときから、彼女の明朗で魅力的な品位のある容姿が、絶えず私を捕らえてはなさなかったのである。

振動のはげしい馬車の幌を通して、市井の雑多な音と匂いが飛びこんでくる。かまびすしい物売りの声、奇妙に甲高い音楽、大氣中を染めているにんにくの匂い、すでに私に馴染みになった音や匂いである。そして、一種独特な川の匂い。その匂いで馬車がどのあたりを通るかわかるように私はなっていた。

私は馬車の窓の被いをめくり、外をながめた。思った通り馬車は黄色く濁った蘇州河に添って下っていた。河岸には拾ってきた古材を打ちつけただけの低いくろずんだ小屋や、板さえもなく棒に破れたむしろを渡しただけの、到底人間の住家とは思えない群落が延々と並んでいる。この寒空に裸の垢だらけの子供や男女が小屋のあいだを動きまわっている。

この群落のとはいまから三十余年前、清国内をゆるがした太平天国の乱によって流入した難民が作ったもので、一時は五十万人に達したといわれている。その後、上海が貿易港として整備されてくると、今度は

各地から職を求める人々が無制限に流入してきて、この一帯に一大貧民地区をかたち作ったのである。

それを左に見ながら馬車は木造の橋を渡り、駅をめざした。駅に着くと馬車を待たし、私は雑踏する構内に足をふみいれた。チョッキにつけた懐中時計を取り出してながめると、九時十七分であった。もし、列車が定刻につくとしたらあと三分ほどであるが、これまでの例からみて清国の列車が定時に到着することは稀れであるので、私はゆっくりとホームに入った。事実、定刻になっても列車の入ってくる気配はなく、駅員も毎度のことなのでのんびりと同僚と話をしている。ホームには私のように到着する列車を待つ出迎える人々があちこちにかたまりあっていた。

列車は二十分超過して姿を現わした。私は蒸気を吹き出す機関車の横を急ぎ足に歩いて、一等車をめざした。すると、乗降口から走るように降りたマーガレットの父のヘンリー・エヴァンズ氏の姿が見えた。

エヴァンズ氏の態度は奇妙だった。うろうろとあたりを見まわし、改札口に向って小走りに走り出そうとして、そちらへ向う私を発見するや息せききって駆け寄ってきた。氏の顔面が蒼白であることに私は気づいた。

「ホイットニー君、きみに会えてよかった。マーガレットが……マーガレットが……」

そう言うなり極度の緊張状態に耐えきれなくなったのか、ふらふらとよろめいた。私が反射的に氏の身体を押えなかつたら倒れてしまったであらう。

「どうしたのです？　しっかりしてください」

私の声にエヴァンズ氏はなんとか立ち直り、目をしばたいた。

「ちよっと目まいがしたただけだ。それよりもマーガレットが消えてしまったのだ。すぐ警察に知らせなければならん。ああ、わしのマーガレット」

エヴァンズ氏の気が動転しているのは明らかであつ

たが、私は氏の言葉の内容に鼓動が止まるかと思われるほどの衝撃を受けた。

「ああ、旦那様、ここにおられましたか。おくれてしまつて申し訳ございません」

その声に振り返るとエヴァンズ邸の執事のウィルフォードであつた。

「いいところへ来た。きみは客室から荷物をとつてきてくれたまえ」

「はい。ご主人様はお加減が悪いのですか？　お顔色が……」

「エヴァンズさんはぼくが見ている。早くきみは荷物を」

ウィルフォードは長身の身体をまるめるように一等客室に走っていった。ともかくもエヴァンズ氏を私は駅構内の待合室に連れこんだ。

「なにがあつたのです。マーガレットの身になにが起つたのです？」

私は放心したようになったエヴァンズ氏の肩をゆすり切迫した口調でたずねた。

「消えてしまったのだ。走っている列車から消えてしまったのだ……」

エヴァンズ氏は急に目を見開くとふるえる声で繰り返した。

2

旅行靴をとってきたウィルフォードはエヴァンズ家の馬車で、私はエヴァンズ氏と領事館の馬車で、ともかくも領事館に急いだ。清国に居住している西欧人の事件を扱うのは領事館警察である。私の見たところ、遺憾ながら清国にはイギリスやフランスのような近代的な警察力はなく、組織的な捜査力にもとぼしいのが現状である。

領事館にもどると、私はただちにヴィクトリア・ホ

テルに滞在しているサミュエル・ホック氏と、張志源警補にすぐ来てほしいと使いを走らせた。ふたりが来るまでのあいだ、領事館警察をとりしきっている元ロンドン・スコットランドヤードのシンプソン警部と私はこもごもエヴァンズ氏から事情を聞いた。

領事館に来て一杯のスコッチを飲んだエヴァンズ氏は、ようやくいくらか気持ちが落着いてきたようで、あい変らず驚愕と不安からはさめないまま、次のような奇怪な事実を物語った。

「北京での商用が予定通りすんで、きのうの朝、わたしとマーガレットは列車に乗ったのです。上海まではざっと九百二十マイル。丸一日一晩の旅ですから、一等車室に入るとわたしたちはくつろいで、わたしは書類の整理を、マーガレットは読書をしたり、編物を取り出したりしていました。心ここにあらずといった態度でした。父親として娘のうれしさが手にとるように伝わってきて、わたしはアーサー君とめぐり合った娘の